

膨大な死の前で

村上陽子

二〇一一年三月一日、私は神奈川県川崎市市の自宅にいた。これまでない大きな揺れに驚き、何が起こったのかを把握しようとしてテレビをつけた。しかし、そこに映し出された映像は、この出来事の全貌を把握することの不可能性を突きつけてくるものだった。さらに福島第一原発の異常が報じられ、事態が悪化の一端を辿っていることだけが身に迫って感じられた。私は十年前、同じように画面越しに惨状を見つめ続ける体験をしたことを思い出していた。

沖縄で大学生生活を送っていた二〇〇一年九月一日のことである。台風情報を見るためにつけっぱなしにしていたテレビに、ニューヨークのツインタワーに航空機が突っ込む映像が飛び込んできた。強まっていく風の音を聞きながら、テレビの前でうずくまるようにして、眠れない夜を過ごした。

九・一一が沖縄にもたらした影響は大きかった。在沖米軍基地は即座に警戒レベルを引き上げ、基地外の人間への警戒心を剥き出しにした。兵士たちの銃口は、沖縄の民間人に向けられていたのである。あのとき、沖縄に住む人々は、自分たちがテロの標的であると同時に、テロリストとして占領者に恐怖を与える存在でもあることを改めて自覚させられた。日本本土からの観光客や修

学旅行のキャンセルも相次いだ。それ自体は至極当然の反応である。基地のある島で生きることの危険が露呈したのだから。しかし、沖縄県は早々に「だいじょうぶさあく沖縄」キャンペーンを展開し、まったく根拠のない「安全」をアピールして観光客を取り戻そうとした。いま、放射能汚染の「風評被害」を払拭しようとする試みを見ると、私はあの不毛な「だいじょうぶさあく沖縄」を思い出す。あれから十年を経てなお、沖縄は危険のまっただかに取り残されたままで。のみならず、新たな米軍基地や自衛隊基地を押しつけられようとしている。福島で生活を続けている人々もまた、生を脅かされ続けている。基地や原発への徹底した拒否なくして、いったいどのような「安全」を保障できるのだろうか。

私は九・一一を沖縄で、三・一一を関東で体験した。それはどこからも出来事のゼロ地点から遠く離れた場所である。しかし、銃口や放射能汚染の脅威をまざまざと感じながら生きざるを得ない場所でもある。そのような位置から、いま、どのような言葉を紡ぐことができるだろうか。嶋津与志の「骨」（『沖縄文学全集 第8巻』国書刊行会）という一編の小説を手がかりとして、それを考えてみたいと思う。

一九七三年に第一回琉球新報短編小説賞を受賞したこの作品は、戦後二八年目の沖縄を舞台としている。本土の建設会社が那覇を一望できる小高い土地を買取り、ホテルの建設に着手する。しかしまもなく、そこに膨大な数の沖縄戦の死者が埋まっていることが明らかになる。息子に勝手に土地を売り払われた元の地主のカメ婆さんと、市役所から派遣された五人の男たちによって遣

骨収集の作業が始まる。カメ婆さんは「何千」にも上る、「数えられない位」の死者がそこに埋められていると言う。目印として植えられたガジュマルは、死者の養分を蓄えて大樹へと成長している。

主人公の鎌吉も作業員の一人として遺骨収集に携わる。穴が深くなるにつれて「まるごとの骨」に加えて「鉄力ブトとか軍靴とか水筒とか銃剣」が出るようになり、周囲は「戦場跡」さながらの様相を呈していく。鎌吉の父親は沖繩戦で死に、遺骨も見つからない。物心つく前に終戦を迎えた鎌吉は、父の死を「自分とは関りのない遠い昔の伝説」のように思ってきたが、いつのまにか「目の前に父親が横たわっているような錯覚」にとらわれる。「手にとるごとに生身の人間の肉体の想像がまとわりついて」くる骨に囲まれて、鎌吉は死者と自分との関わりを考えはじめるのである。

しかし、本土から来た現場主任は「機械を遊ばせておくと一日何十万の損害になる」のを懸念するばかりである。カメ婆さんと男たちは、ガジュマルを切り倒そうとする現場主任と鋭く対立していく。

遺骨の埋まった土地を踏みたくブルドーザーの騒音は、作業班の雑談を奪い、骨が崩れる音をかき消す。現場主任の言葉が、これほどの事故を起こしてなお原発にしがみつこうとするこの国

の醜悪な政府や経済界の発言とあまりに似通っていることはいまさら指摘するまでもない。「復興」への空々しいかけ声が、沈黙の中から生起するかすかなざわめきをも奪い去ろうとしている。

しかし、鎌吉はすでに骨が立てる音を聞き、死者と自分の関わりを見つめ直しはじめている。カメ婆さんや戦中世代の男たちが骨に触れて語り出す戦争の記憶を聞き取り、誰も知らない死者の頭骨の上に父親の面影を重ね合わせている。思いがけなく直面することになったおびただしい骨は、鎌吉が見過ぎてきた死者との関わりを浮かび上がらせるものとなる。

私たちもまた、このような死者の到来をすでに予感してはいないだろうか。三・一一の出来事を受けて、地震や核にまつわる数多の記憶が呼び起こされ、語り出されている。それらはゼロ地点から遠い場所で生きる人々にも、確かに伝達されているのだ。無数の死者が、自分に連なる存在や言葉とふいに重なり合う瞬間に、私たちはこれから先、幾度も出会うのではないか。

死者と生者との間には、断絶ではなく、ゆるやかなつながりがある。膨大な死者を内に抱える底の見えない穴の淵に立つとき、そのようなつながりをたぐり寄せることこそが、私たちに把握しきれない出来事の残響を手渡してくれる。そのような聞き取りと想像の試みの中から「希望」と呼ばれるものが浮かび上がるのではないかと思う。